

校内研究計画

I 研究主題

**児童生徒の連続的な学びをはぐくむ小中連携の在り方
～「わかった」「できた」が生まれる授業をめざして～**

II 主題設定の理由

1 昨年度までの研究の成果と現在の教育的な課題から

平成 27・28 年度は、児童生徒の連続的な学びをはぐくむ小中連携の在り方を研究主題として、その中でも道徳授業のあり方について研究してきた。平成 27 年度は「言語活動」に着目し、話し合いの組織化や書く活動等による授業研究を積み上げ、言語活動を生かしたスキルや方法を検討し、道徳授業の授業力向上を図ってきた。平成 28 年度はアクティブラーニングを取り上げ、多面的・多角的に考えたり、出会った問題について解決を図ったりする授業づくりを構想し、役割演技やインタビュー、ペアやグループでの話し合い、資料の分割提示といった指導の工夫を取り入れ、道徳の授業力向上を図ってきた。

昨年度から滝沢市小・中ジョイントアップスクール事業の 2 期目に入り、ここでは「教科指導」に重点をおいた小中連携が求められている。また、学力保障も大きな課題の一つであり、岩手県教育委員会が掲げている「いわての授業づくり 3 つの視点」も踏まえ、道徳のみならず各教科・領域において「わかった」「できた」が生まれる授業をめざして、授業改善を図っていくことにした。

2 学校教育目標の具現から

一本木小学校の学校教育目標では、「よく考える子」を位置付けており、「よく聞き集中する子」「自分の思いや考えをもち表現する子」「できるまでねばり強く取り組む子」を目指す児童の姿としている。また、一本木中学校では「自ら粘り強く学ぶ生徒」を位置付けるとともに「自ら考えをもち表現する力を育てる」を重点として位置付けている。このことから小・中学校で共通して「主体的・対話的に問題解決に取り組む、表現できる児童生徒」をめざしていく。

3 一本木中学校区の実態から

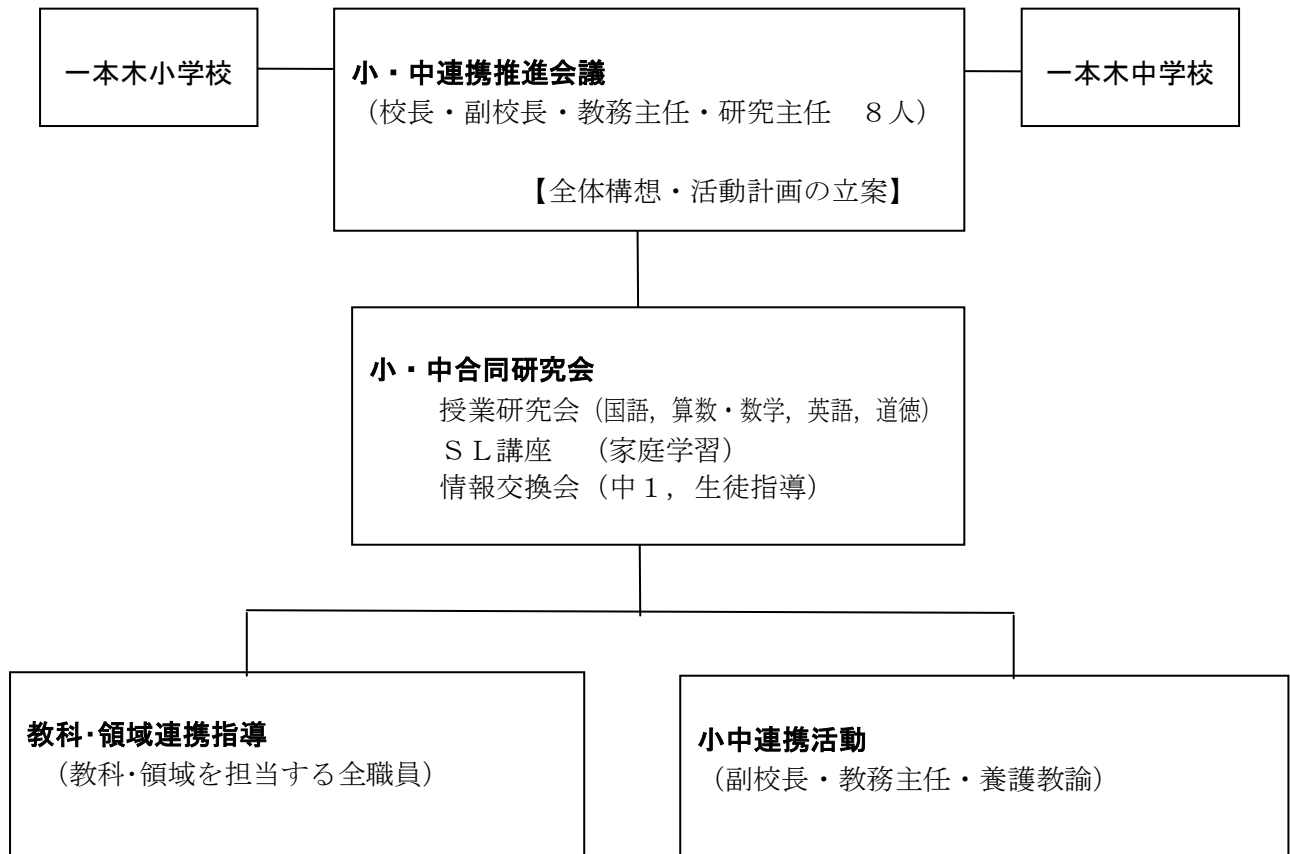
一本木中学校区は、一本木小学校（131 名）、一本木中学校（74 名）の 1 小 1 中の校区であり、児童生徒は小・中学校を通して同じ友達と学ぶこととなる。このことは、小・中学校が連携し合い、9 年間を見通した教育を展開していくことに大きな責任と成果が求められる。

ここ 2 年間は道徳授業の研究を中心に行い、人としての資質、人間とのかかわり方等に成果が見られる。その反面、児童生徒の学力に対する取り組みを十分に行ってきたとは言い難い。「いわての授業づくり 3 つの視点」に基づき、「学習の見通し」「学習課題を解決するための学習活動」「学習の振り返り」について小・中学校で連続性や一貫性をもち、児童生徒の連続的な学びを育てるために、諸調査の結果を活用し、「わかった」「できた」が生まれる授業を構想し、教員の授業力向上と、それにとまなう児童生徒の基礎基本の学力の定着を図りたいと考え、本主題を設定した。

Ⅲ 研究の目標

9年間を見通した小中連携指導の実践を通して、児童生徒の「わかった」「できた」が生まれる授業を構想し、授業力向上を図る。

Ⅳ 研究組織



Ⅴ 研究の全体構想

研究主題
児童生徒の連続的な学びをはぐくむ小中連携の在り方
～「わかった」「できた」が生まれる授業をめざして～

研究の目標

9年間を見通した小中連携指導の実践を通して、児童生徒の「わかった」「できた」が生まれる授業を構想し、授業力向上を図る。

教科・領域の連携指導

教科・領域での連携

- (1) 「わかった」「できた」が生まれる授業の工夫
 - ・学習の見通し
 - ・学習課題を解決するための学習活動
 - ・学習の振り返り
- (2) 学力分析
- (3) 授業交流
- (4) 小中合同授業研究会

確かな学習基盤づくり

- (1) 学習の基盤となる学力（読・書・算の育成)
 - ①朝活動の充実
 - ②チャレンジタイムの設定（小）・検定への挑戦（中）
 - ③チャレンジテスト（小）・学習コンクールへの挑戦（中）
 - ④オリジナル詩集（選集）による、音読暗唱活動（小）
 - ⑤読書活動の推進
- (2) 9年間を見通した学習習慣の形成
 - ①授業の約束
 - ②話型 ③構造的な板書とノートづくり

